CHAMLANG 2015 報告

■山　域

ネパール・ヒマラヤ、マカルー地域・チャムラン（7319 m）

■チーム名

「CHAMLANG JAPAN EXPEDITION 2015」

■期　間

2015年　9月25日～11月17日

■メンバー

隊長：今井健司（33）、隊員：武田真敏（30）

■遠征の目的

チャムランはネパール・クーンブ地方のホングー・コーラにあり標高は7,319 mである。チャムランは現地語で「羽ばたく大鳥」を意味し、山容はその名にふさわしく東西に長く伸び、巨大な北壁を携えている。この山がその魅力的な姿にもかかわらず近年ほとんど話題に上ることがないのは、人気エリアのメラ・ピーク周辺からさらに数日のキャラバンを必要とし、至近の村（カーレ）からも距離があるため、経費を抑えた短期間で済むような遠征が組みにくいからかもしれない。しかし、だからこそヒマラヤの奥深くで大きな山と対峙しているという、遠征登山の魅力を味わうことが可能ともいえる。

チャムランは1962年に南西壁から日本隊（北海道大学隊）によって初登頂され、西稜も同じく日本隊によって登られている。しかし、北壁はその美しい山容にもかかわらず81年にR・メスナー、D・スコットらによって7,010 m峰まで登られただけに過ぎず、魅力的なラインがほぼ手つかずで残されてきた。近年ではイギリスのニック・ブロックらが北壁にトライしようと試みたが悪天によりほとんど取り付くこともできなかったようである。

この遠征の目標は今井による北壁の単独登攀である。主峰直下の標高差1,800 mに及ぶ美しい氷雪壁のラインから主峰への登頂を狙いたい。またそれに先立ち、順応・下降路偵察を兼ねた西稜から主峰への隊としての登頂も目指す。同時に周辺に数多ある魅力的な山や壁の偵察も行いたいと思っている。

■チャムラン西稜アタック（１０月１７日～２１日）

10月17日　チャムランＢＣ→Ｃ１

朝7時、ＢＣ出発。ホングー・コーラを渡渉し、チャムラン下部を南下して西稜の取り付に向かう。このあたり標高5,000 m付近では雪はない。日が当たるまではかなり寒く、渡渉の際も飛び石が凍っていてヒヤッとすることもあった。ガラガラの丘を過ぎて西稜に取り付くとそこはガラガラの尾根で落石の危険が高い。標高5,300 m付近から雪が出はじめ、次第に岩と雪のミックスになりいやらしい。

5,700 mでは7 mほどの垂壁が立ちはだかり、スタカットで登る。6,000 mのジャンクション・ピークまでのリッジは景色もよく特に難所もなく快適。6,000 mから進路を北に折り曲げ細いリッジ上になる。難しくはないが、両側の切り立った雪面はその先が崖になっているらしく落ちられないので慎重に歩を進める。17時に6,100 mのジャンクション・ピークに到着しテント設営。

10m近い垂壁をザックを背負いダブルブーツで越えていく

10月18日　Ｃ１→Ｃ２

風もなく穏やかな夜だった。明け方の気温は－18度と比較的暖かい。次第に明るくなる空と遠くまで見渡せる空気と今日も天気は穏やかであろうと思われた。テント撤収したらジャンクション・ピークの少し先に狭いが平らな場所があったので荷物を軽くするために帰りの食料、ガスをデポしていく。予定では今日が西稜での核心になるであろうと予想していた。細いリッジ状が続きかなり立っているところが連続していくので最初からコンテで行くことにした。雪は相変わらず踝くらいまでの締まった雪質だが所々で膝くらいのところもあればダブルアックスで氷化した急なリッジをこなすこともある。時には氷塊となった雪庇状を大トラバースすること

もあったがスカスカのザラメ状でアイゼンを深く蹴り込んでも崩れてしまうような嫌らしい雪質でプロテクションも取れず緊張した。コンテとスタカットを切り替えながら進んでこの日のキャンプ地に着くまでロープは外さなかった。北側を見るとローツェ、東にはピーク41が見える。遥か見上げていたピーク41と目線が同じくらいになってきて自分たちの登ってきた高度を実感した。ローツェに隠れてエベレストの頭も少し見えるらしいがはっきりとはわからない。ローツェにはいつも山頂から東に長い雲が伸びていてあっちは風が強いのだろうなと思えた。

今日の予定では6,700mのプラトー付近がキャンプ地予定。下からの目視ではわからなかったが6,500m付近で適地になりそうなところを発見。6,700mのプラトーで風に晒されるリスクと照らし合わせて今日はこの場所をC２にした。この時点でかなり息が苦しくなってきていて何をするにも息が切れ、整地してテントの中で水を作り出すのも一苦労だった。

山頂までの急峻な登り

C１～C２間は氷とシュガースノー、ザラメ状が多く見た目以上に悪かった。

10月19日　停滞（レスト）

夜中は地獄の晩でほとんど眠れなかった。私たちがテントを張った場所は風の通り道になっていて夜中ずっとテントを揺らしていた。さらに悪いのは吹き溜まりに張ってしまったらしい。テント設営時にはこんな吹き溜まりになるとは想像していなかった。日本の山の感覚が通用しなくて少し驚いたが、やることは変わらない。ダブルブーツのインナーのまま外に出てせっせと除雪。テントはすでに１／３程度埋まってきていてこのままではポールが折れそうな状況だった。

テントの近くにぽっかり空いている大きな氷の裂け目に除雪した雪をガンガン捨てていくが、高所での影響ですぐに息が上がり効率が上がらない。時には座って足で蹴るように雪を落としていくが下手をすれば自分が滑落してしまう。真夜中で吹雪の中、ヘッドライトの光に横殴りの雪が輝く。動きすぎてついに気持ち悪さを感じるくらいまで高所の影響が出てきた。テントに入ってすぐに横にならず、しばらく座って深呼吸してお湯を飲む。場所を変えようという考えもあったが視界も悪いし下手に動くには危険と判断。昼間と状況が全く変わっているため近くに安全地帯があるかも不明だった。２人で交代して除雪しながら朝が来るのを待った。少し明るくなってきて辺りを少し捜索すると50mくらい下がった辺りに平らな場所を見つけそっちに避難した。この場所も風は少し当たるが吹き溜まらないだけ10倍快適だった。この日はレストという意見で２人とも一致し、午前中はテントで寝ていた。昼になって今日中に6,700mのプラトーまでキャンプを上げるか上げないかで少し意見が分かれたが、結局この日はこの場に停滞を決め込んだ。

10月20日　C２～山頂

相変わらず風は強かったが、アタック決行。巨大なセラックの下をトラバースして登るプラトー周辺はやはり全体が吹き溜まりポイントで腿くらいのラッセルになることもあった。日本では難なくできるはずのラッセルも息が切れ数歩ずつしか進めない。その先はひたすら雪渓状を詰めていく。両手のバイルとキックステップを延々と繰り返すが息がすぐに上がる。体調は良好なのだが息だけが苦しい。傾斜は長次郎雪渓右股の最後の上部くらいなのでロープは出さず各々マイペースで、自分の体と向き合いながら詰めていった。どんなに深呼吸をしながら登っても足が止まる。頑張って30歩登ったら10秒立ち止まってレストというマイルールが出来上がっていった。今井さんもさすがに大変な様子でペースが上がっていない。その「30歩」を繰り返し、いよいよ山頂が近くなってきた。今井さんのペースが上がり追い越され、先に稜線の向こうに消えていった。自分も稜線に出るとすぐに今井さんがいて「あれ？こんな場所でどうしたのだろう」って思うと、「お疲れ！登頂おめでとう!!」って聞こえた。そこが山頂だった。嬉しいと思うよりも先に思ったことは「山頂なの？座っていいかな」だった。ダウンを着ていても寒く強風が吹いている環境で、果てしなく遠くまで見えるヒマラヤの景色に感動した。時間が遅かったので写真を数枚撮ってすぐに下山開始。下山も果てしないクライムダウンで下山し続けるが日没になり闇夜がどんどん濃くなっていく。ヘッデンを付けた頃には真っ暗なプラトーで風が吹きあたりは視界不良でルーファイに神経を使った。それでも何とかテン

山頂でのツーショット

トに着き、テントの中に倒れ込んだ。

10月21日　Ｃ２～ＢＣ

翌朝下山開始。登る前と登頂後では見え方が違うようなチャムランを背に何度も振り返り写真に収める。６,100～６,500ｍ間のいやらしいリッジも慎重にクライムダウンしていき下り続けるが日没を過ぎた５,300ｍくらいのガレ場から濃霧が出はじめ20ｍほどの視界となる。辺りはなだらかな丘上になっていて北アルプスの涸沢をもう少し広くし勾配も急にしたような地形になっている。積んできたはずのケルンもなかなか見つけられず渡渉点へたどり着けずしばらく２人であたりを探す。暫くするとわずかに濃霧の切れ間ができて地形を把握することができた。無事に渡渉してＢＣに戻るとコックが素晴らしい晩飯を用意してくれた。

■「事故概要報告」

11月２日　ＢＣ出発（今井単独）

11月３日　ＢＣ滞在中の武田が上部で行動中の今井を目視。　※確認されたのはこの日が最後。

11月６日　ＡＭ９：00 あらかじめの今井の指示により救助要請。

11月７日　最終下山予定日を過ぎても今井が下山しないため、ＢＣ滞在中の武田が現地スタッフ２名とともにＢＣ撤収（隊長の今井の予めの指示による）して、カーレＢＣへ移動。カンテガチームと合流し状況説明。

11月８日　午後。話し合いの結果、人命救助を最優先ということでカーレ村メンバーがヘリを手配。現地レスキュースタッフ（１名）付ヘリに武田が同乗し上空からチャムラン峰捜索（第１次ヘリ捜索）。※痕跡見つけられず捜索後、同ヘリにて馬目・武田はカトマンズへ移動。

11月10日　午前「第２次ヘリ捜索」

●カトマンズから馬目が同乗しルクラへ。

●そこで現地レスキューガイド１名と合流し、捜索方法と範囲を打ち合わせ。

●チャムラン峰捜索、今井のものと思われる装備（ブーツ、ザック）を標高５,600ｍ付近にてヘリから目視確認。

「第３次ヘリ捜索」

●カーレ村にいったん引き返し、回収体制に入り再度飛行。（馬目カーレにて待機）

●第２次捜索にて目視された地点に現地ガイドがロープにて下降、装備回収（ザック、ブーツ片方、リーシュ）

●現地ガイドがロープを使用し、クレバスの中を目視にて探すが他に発見されたものはなし。午後、馬目はヘリにて回収物とともにカトマンズへ帰着。

●現場の状況などについて関係者と協議。

●捜索打ち切りを決定。

■まとめ

ヒマラヤは日本の山を登るのとはまるでスケールが違い、単純な登頂だけが課題ではない。資金調達、情報収集から始まり、仕事や休みの調整も大変である。普段の日常においても仕事（貯蓄）とトレーニングのバランスに頭を悩ませている。それらの努力と葛藤と情熱とそしてチャンスがあってヒマラヤは行けるのだろうなと感じている。だからこそ価値があるのだと思う。

今回、特にたくさんのことがありハッピーエンドではなかった。しかし、それでも自分の選んだ山であり、やれることをやり切り、楽しみ、そしてしっかりと見つめたと思う。たくさんの反省点がありそれらを見つめなおすことができる私は幸運なのだと思う。

今井さんとはけして長い時間を共に過ごしたとは言えませんが、非常に濃密な時間を共に過ごしました。今井さんの挑戦を間近に見させていただき、彼のやろうとしていることの困難さや緊張をヒシヒシと一緒に経験させていただきました。彼の友人さえも知らない今井さんと共に過ごしていたのだと思います。時に厳しく時にやさしくたくさんの登山技術や生活を教えていただきました。そして最後に身をもって山の怖さや非情さを教えていただきました。

これから先の人生で時折今井さんを思い出すのではなく、今もなおヒマラヤのチャムランの壁の下にいるのだという意識を持ち続けていきたいと思います。決して過去のことにしない。今もなおあの場所に今井さんはいると。そうすることで気が引き締まるような気がするからです。

それが今井さんの最後をご一緒させていただいた私の使命だと思います。